

新訳グリム童話四編

— K H M 九、一一、一二、一五 —

グリム兄弟・作
梅内幸信・訳

『十二人兄弟』（K H M 九）

むかしむかし、あるところに王さまとお妃さまがおりました。二人は、仲良く暮らし、お子さまも十二人おりましたが、けれども、このお子さまたちは、男の子ばかりでした。そこで、王さまが、お妃さまにおっしゃいました。「もし、そなたの産む十三番目の子どもが女の子であれば、十二人の息子たちは亡きものにして、娘の富が大きくなり、その王国が娘一人だけのものになるようにしようぞ。」王さまは、ほんとうに十二個の棺を作らせ、はやばやと匏くずをつめさせ、その一つ一つには死者の枕を入れさせ、これらを小部屋に置いて鍵をかけさせ、それから、その鍵をお妃さまにわたした上で、このことを他言してはならん、と王さまは申しつけました。

ところが、お妃さまは、こうなりますと、一日中座りどおしで悲しんでおりましたので、いつもお妃さまのそばにまとわりついて、お妃さまが聖書から取ってベンヤミンと名づけた一番末の息子が、お妃さまに言いました。「おかあさま、

どうしてそんなに悲しんでいらっしゃるのですか。「坊や」と、お妃さまは答えました。「坊やには話しちゃんならないのよ。」けれども、坊やがお妃さまにしつこくせがみしましたので、とうとうお妃さまは、例の小部屋に行つて、鍵をはずして、坊やに、もうすでに鉋くずのつめてある十二個の棺を見せました。それから、お妃さまは、おっしゃいました。「かわいかわいベンヤミン坊や、これらの棺をおとうさまが、おまえとおまえの十一人のお兄さんたちのためにこしらえさせたのですよ。そのわけはね、おかあさんが今度女の子を産めば、おまえたちはみんな殺されて、この中に入れられて、埋められることになっているからなのよ。」お妃さまが、こうおっしゃつて、涙を流しますと、この息子は、お妃さまを慰めて、こう言いました。「おかあさま、泣かないでください。ぼくたちは、きつとみんなで助けあつて、ここから出て行きます。」すると、お妃さまが、おっしゃいました。「坊や、おまえの十一人のお兄さんといっしょに、森の中へ行きなさい。それから、いつでも森の中の一番高い木の上のぼつて、見張りをし、このお城の方を見ているのですよ。おかあさんが、男の子を産んだら、白い旗をかかげます。そのときは、帰つてきても大丈夫ですよ。女の子を産んだら、赤い旗をかかげます。そのときには、できるだけ早くお逃げなさい。神さまが、おまえたちを守つてくださいますように。おかあさんは、毎晩起きて、おまえたちのためにお祈りをします。冬には、おまえたちが火にあたつて体を温められますように、夏には、おまえたちが暑さに苦しめられないようにつてね。」

このように、お妃さまが息子たちに神さまのご加護をお祈りしてから、息子たちは、森の中へ行きました。息子たちは、順番に見張りをして、一番高いカシの木の上のぼつて、お城の方を眺めておりました。十一日たつて、順番がベンヤミンに回つてくると、そのときベンヤミンは、旗がかかげられるのを見ました。けれども、それは白い旗ではなく、血のように真っ赤な旗でした。これは、息子たち全員が死ぬ運命にあることを告げるものでした。お兄さんたちは、これを聞きますと、腹を立てて、言いました。「ぼくたちは、女の子一人のために死ななきゃならないんだな！ ようし、ぼく

たちだって、この仕返しをしてやるぞ。女の子を見つけたら、その赤い血を流さずにおくものか。」

こう言つて息子たちは、森の奥深くへと入つて行きました。すると、森の真ん中の一番暗いところに、魔法にかけられた小さな、からっぽの家を見つけました。そこで、息子たちは言いました。「ぼくたちは、ここに住むことにしよう。それにベンヤミン、おまえは末っ子で、一番力が弱いから、おまえが家にいて、家の仕事をするんだ。兄さんたちは、外に出て、食べ物を取ってくるから。」こうして、お兄さんたちは、森の中に入つて、ウサギや野ジカ、鳥や雄バトなど、食べられるものはなんでも撃つて、ベンヤミンのところにもつてきました。すると、ベンヤミンは、それを料理して、お兄さんたちの空腹をいやしてあげるのです。この小さな家で息子たちは、十年間いっしょに暮らしましたが、退屈することもありませんでした。

息子たちの母親にあたるお妃さまの産んだ子どもは、今ではもう大きくなって、氣立てが良く、美しい面立ちの娘に育ち、その額には一つの金の星がありました。あるとき、洗濯物がたくさんあつて、その中に十二枚の男ものの肌着を見つけますと、おかあさまにたずねました。「この十二枚の肌着は、どなたのものなのかしら。おとうさまのものにしたら、とても小さすぎるわ。」そこで、お妃さまは、氣が重くなりましたが、こう答えました。「いいかい、これはおまえの十二人のお兄さんのものなのよ。」すると、娘は言いました。「あたしの十二人のお兄さまたちは、どこにいらっしゃるの？」お兄さまたちのことについて、まだ一度もうかがつたことないのに。「そこで、お妃さまは答えました。「どこにいるかは、神さまだけがごぞんじなの。お兄さんたちは、世界中をあちこちさまよっているのですよ。」こう言つてお妃さまは、娘を例の小部屋につれて行つて、その部屋の鍵をはずして、鉤くずがつめられ、死者の枕が入っている十二の棺を娘に見せてやりました。「これらの棺はね」と、お妃さまはおっしゃいました、「おまえのお兄さんたちが入るために作られたのだけれど、お兄さんたちは、おまえが生まれる前に、こっそりここを出て行ってしまったのです。」こう言つてお妃さまは、

これまで起こったことを、残らず娘に話して聞かせました。すると、娘は言いました。「おかあさま、泣かないでちょうだい。あたしが行って、お兄さまたちを探します。」

こうして娘は、十二枚の肌着をもつて旅に出かけ、まっしぐらに大きな森の中に入りました。娘は、一日中歩きどおしに歩くと、晩には例の魔法にかけられた小さな家にたどりつきました。娘がその中に入ると、一人の男の子がおりましたが、この男の子がたずねました。「どこからきたの？ それに、どこへ行くの？」娘がとても器量良しで、お姫さまのような衣装を着て、その額に星を一つつけておりましたので、男の子はおどろいてしまいました。すると、娘は答えました。「あたしは王の娘で、あたしの十二人のお兄さまたちを探しているの。青空の続くかぎり、お兄さまたちを見つかるまで、どこまでも行くつもりよ。」娘は、こう言って、男の子にお兄さんたちの十二枚の肌着を見せました。すると、ベンヤミンは、それが自分の妹だと分かりましたので、こう言いました。「ぼくは、ベンヤミンだよ。おまえの一番下の兄さんさ。」妹は、うれしさのあまり泣きだし、またベンヤミンも泣きだしました。そうして二人は、いとおしさのあまりキスして、抱きあいました。そのあとでベンヤミンは、言いました。「ねえ、きみ、忘れていることが一つあるんだ。ぼくたちは、ぼくたちが出あう女の子はだれでも生かしておかないと約束したのさ。だって、ぼくたちは、女の子一人のおかげで、ぼくたちの国から逃げださなければならなかったんだからね。」すると、妹は言いました。「それであたしが十二人のお兄さまたちを救ってあげられるのなら、あたし喜んで死にましよう。」「だめだよ」と、ベンヤミンは答えました、「死んじやいけないよ。十一人の兄さんたちが戻ってくるまで、この桶の中に座っててね。ぼくが、きつと兄さんたちと話をつけるから。」妹は、言われたとおりにしました。夜になって、お兄さんたちが狩から戻ってくると、食事の準備ができていました。そうして、お兄さんたちが食卓について、食べていると、「なにか変わったことがあったかい？」とたずねました。「なんにも知らないの？」と、ベンヤミンは言いました。「知らないよ」と、お兄さんたちは答えました。そこでベンヤミ

ンは、続けて言いました。「兄さんたちは森の中にいて、ぼくは家にいたから、兄さんたちよりも多くのことを知っているんだよ。」「それじゃ、話してよ」と、お兄さんたちは、大きな声で言いました。そこで、ベンヤミンは答えました。「ぼくに約束してくれるかい？ ぼくたちが出あう女の子を殺さないってさ。」「いいとも」と、お兄さんたちは、みんな大きな声で言いました。「その子だけは、かんべんしてやろう。さあ、話してくれれば。」そこで、ベンヤミンは、「ぼくたちの妹がきたんだ」と言つて、桶をもちあげると、妹が、お姫さまのよそおいで姿を現し、その額には金の星をつけておりました。お姫さまは、たいそう美しく、しとやかで、上品でした。それで、お兄さんたちは、みんな喜び、お姫さまの首に抱きついてキスし、心から妹を好きになつてしまいました。

こうして、お姫さまは、ベンヤミンといっしょに留守番をして、家事を手伝いました。十一人のお兄さんたちは、森に行つて、けものやシカ、小鳥、小さな雄バトをつかまえて、食料としてもつてきました。すると、妹とベンヤミンは、苦勞しながら料理をこしらえました。妹は、煮炊き用の薪や、青物に使う野菜を探し、鍋をいくつも火にかけましたので、十一人のお兄さんたちが帰つてくるころには、いつでも食事の準備ができていました。妹は、そのほかにもまた、家の中をきちんと片付け、ベッドに真っ白で清潔なカバーやシーツをかけておきましたので、お兄さんたちは、いつも満足げで、妹ととても仲良く暮らしておりました。

あるとき、妹とベンヤミンは、留守番をし、おいしいご馳走をこしらえましたので、兄妹みんながそろつて食卓につき、とても楽しく飲んだり食べたりしておりました。さて、この魔法にかけられた小さな家には、小さなお庭があつて、その中には、センジュギクとも呼ばれるユリが十二本生えていました。そこで、妹は、お兄さんたちを喜ばせようと、十二本のユリを折つて、お兄さん一人一人に食事のあとに一本ずつあげようと考へておりました。ところが、妹がユリを折ると、そのとたんに十二人のお兄さんたちは、十二羽のカラスに姿を変えて、森をこえて飛び去つてしまい、家も庭ごと消えて

しまいました。かわいそうに、妹は、ひとけ人気のない森の中に一人とり残されてしまいました。あたりを見回すと、妹のそばに一人のおばあさんが立たつていて、こう言いいました。「これ、おまえさん、なんとしたことをしたのだい。なんで、十二本の白しろい花はなをそのままにしておかなかつたのかい？ あれは、おまえさんの兄あにさんたちだつたのだよ。もう兄あにさんたちは、いつまでもカラスのまままだよ。」妹は、泣なきながら言いいました。「お兄あにさんたちを助たすける方法ほうほうは、ないものかしら。」

「ないね」と、おばあさんは言いいました、「助たすけるみちは、たつた一ひとつあるにはあるけれど、それは、むずかしくつてね、おまえは、そんなことをして兄あにさんたちを救すくい出すことなんかできやしないよ。やるとなればね、おまえは、七なな年のあいだ唾わしでいなきやならない。口くちをきいてはいけないし、笑わらつてもいけない。それで、もしおまえがたつた一ひと語ことでも口くちをきこうもんなら、いいかい、七年がほんの一いち時間じかんたりなくてもいけないんだよ、それで、みんな水みずの泡あわになつちまう。それどころか、兄あにさんたちは、そのたつた一ひと語ことで、殺ころされてしまうのだよ。」

これを聞きいて妹は、心こころの中で、「きつと、お兄あにさんたちを助たすけだすことができるわ」と考えました。そうして、その場ばから立ち去さって、一本の高たかい木きを探さがしだすと、その上うへに腰こしをおろして、糸いとを紡つむぎましたが、けれども、口くちもきかず、笑わらいもしませんでした。あるとき、一人の王おうさまが、この森もりで狩かりをしておりました。王おうさまは、一いっ匹びきの大きな獵りよけん犬けんをつれておりました。この獵りよけん犬けんが、お姫ひめさまの座すわっている木きのところへ走はしりよつて、そのまわりを跳とびはね、木きの上うへの方ほうに向むかつて吠ほえたてました。そこで、王おうさまが木きのそばにやつてくると、その額ひたいに金きんの星ほしをつけた美うつくしいお姫ひめさまが目めにとまりました。王おうさまは、その美みしさに見み惚ほれてしまいましたので、お姫ひめさまに向むかつて、自分じぶんの妻つまになる気きはないかと、声こゑをかけた。お姫ひめさまは、返へん事じはしませんでした。けれども、ほんの少すこしうなずききました。そこで、王おうさまは、自分で木きのぼり、お姫ひめさまを木きからおろし、お姫ひめさまを自分じぶんの馬うまに乗のせて、つれ帰かえりました。ご婚こん礼れいの式しきが、たいそう華はなやかに、喜よろこびのうちにとり行おこなわれました。けれども、花はな嫁よめは、口くちをきかず、笑わらいもしませんでした。二人ふたりは、なん年ねんか楽たのしく暮く

りましたが、王さまの母親はよこしまな女でしたので、若いお妃さまの悪口を言い始めて、王さまに向かつて、こう言いました。「おまえがつれてきたのは、卑しい乞食娘ですよ。こつそり、どんなだいそれた悪事を働いているやら、知れたものではありません。あれが唾で、口がきけないにしても、笑ったってよさそうなものじゃありませんか。いいかい、笑わない人は、心にやましいところがあるんですよ。」王さまは、初めはそれを信じようとはしませんでした。けれども、老いた母親が、いつまでたってもそのことを口にし、数数の悪事をお妃さまのせいに行しましたので、とうとう王さまは説き伏せられて、お妃さまに死罪を申しわたしたのです。

こうして、中庭に薪が高くつまれて、火がつけられ、その中でお妃さまは火あぶりの刑に処せられることになりました。王さまは、高いところにある部屋の窓ぎわに立っておりましたが、今でもお妃さまをたいそういとおしく思っておりまして、目に涙を浮かべて眺めておりました。お妃さまが、しっかりと柱にしばりつけられて、燃える火の舌がお妃さまの衣装をペロリペロリとなめ始めたとき、そのときちょうど七年の歳月の最後の瞬間が過ぎ去りました。すると、空中にバタバタという音が聞こえて、十二羽のカラスが飛んできて、舞いおりました。カラスの足が地面に触れると、カラスたちは、お妃さまの十二人のお兄さんの姿になりました。お妃さまが、十二人のお兄さんたちを救ったのでした。お兄さんたちは、火をけちらして、炎を消し、かわいい妹を助けたすと、妹にキスし、抱きしめました。こうして、お妃さまは、口を開いて、話しても良いことになりましたので、なぜ自分が唾のままできて、一度も笑わなかったかということの理由を王さまに話しました。王さまは、お妃さまが無実であったことを知って、喜びました。それから、みんないっしょに、死ぬまで仲良く暮らしました。よこしまなまま母は、裁きを受け、煮えたぎる油と毒蛇のたくさんつまった樽の中へおしこまれて、ひどい死に方をしました。

『兄さんと妹』（KHM—1）

兄さんが、妹の手を取って、言いました。「お母さんが死んでから、ぼくたちにはなんにも楽しいことがないね。あとからきたお母さんは、毎日ぼくたちをぶつし、そばによると、足でけとばすんだから。残りものの固いパンの耳が、ぼくたちの食事だし、これじゃ、テーブルの下にいる犬の方がましだよ。だって、今のお母さんは、犬にはときどきおいしいものをあげるんだから。こんなこと、ぼくたちのお母さんが知ったら、情けなく思うだろうなあ。さあ、いっしょに遠いところに行こう。」二人は、一日中歩き続けて、野をこえ、畑をこえ、石ころ道を行きました。雨がふると、妹が言いました、「神さまと、あたしたちの心が、いっしょになって泣いているんだわ。」日が暮れると、二人は、大きな森の中に入りましたが、悲しみと空腹と長旅でとても疲れていたので、木の洞に入って、眠りこんでしまいました。

次の日の朝、二人が目をさますと、すでにお日さまは、空高く昇っていて、木の洞へ暑い日差しがさしこんできました。すると、兄さんが言いました、「ねえ、ぼく、のどがかわいたから、わき水があれば、行って飲みたいな。あれえ、水の音が聞こえるぞ。」兄さんは、立ちあがり、妹の手を取って、わき水をさがしに行こうとしました。ところが、意地悪なママ母は、魔女で、二人の子どもたちが逃げだしたことをちゃんと知っていて、魔女の忍び足で、こっそりあとをつけてきて、森の中のわき水というわき水に魔法をかけてしまっていました。やがて二人は、わき水を見つけました。わき水がキラキラ光って、石の上へあふれだしているのを見ると、兄さんは、その水を飲むうとしました。けれど、妹の耳には、サラサラ流れるわき水が、「わたしの水を飲む者は、トラになる。わたしの水を飲む者は、トラになる」と言っているように聞こえました。そこで、妹は、「お願いだからお兄さん、飲まないで。飲んだら、お兄さんは、おそろしいけもになつて、あたしを食いちぎってしまうわ」と叫びました。兄さんは、ひどくのどがかわいたのですが、飲むのをやめて、「次

のわき水が見つかるまで待つよ」と言いました。二人が二番目のわき水のところにくると、このわき水も、「わたしの水を飲む者は、オオカミになる。わたしの水を飲む者は、オオカミになる」と言っているように聞こえました。そこで、妹は、「お願いだから、お兄さん、飲まないで。この水を飲む者は、オオカミになって、あたしを食べてしまうわ」と叫びました。兄さんは、飲むのをやめました、「次のわき水が見つかるまで待つよ。でも、そのときは、おまえがなんて言うたって、飲むからね。死ぬほど、のどがかわいているんだから」と言いました。二人が三番目のわき水のところにくると、妹の耳には、サラサラ流れるわき水が、「わたしの水を飲む者は、シカになる。わたしの水を飲む者は、シカになる」と言っているように聞こえました。妹は、「ああ、お兄さん、お願いだから飲まないで、飲んだらお兄さんは、シカになって、あたしのところから逃げだしてしまおうわ」と言いました。けれど、兄さんは、すぐさまわき水のそばにひざをついて、かがみこむと、その水を飲んでしまいました。すると、最初の一滴が唇にふれたとたんに、兄さんは、子ジカに変わってしまいました。

妹は、魔法にかけられた兄さんがかわいそうで、涙を流しました。すると、子ジカも泣いて、とても悲しげに、妹のそばに座りました。とうとう、女の子は、「泣かないでね、子ジカちゃん。あたしは、決してあんたを見捨てたりなんかしないから」と言いました。それから女の子は、自分の黄金の靴下どめをはずして、それを子ジカの首にはめると、イグサをつみ、それを編んで、一本のやわらかな綱を作りました。その綱を子ジカにつなぐと、女の子は、子ジカをつれて、どんだん森の奥へと入って行きました。二人が、とても長いこと歩いて行くと、しまいには小さな家のあるところに着きました。女の子が中をのぞくと、その家は空き家でしたので、女の子は、「ここだったら、あたしたち暮らしてゆけるかも知れないわ」と考えました。そこで、女の子は、子ジカのために木の葉やコケをさがし、やわらかな寝床を作り、毎朝出かけては、草の根やイチゴ、木の実を集めて自分の食べものにし、子ジカのためには、やわらかい草を取ってきてあげま

した。子ジカは、草を女の子の手から食べ、満足そうに女の子の前で遊びまわっていました。日が暮れると、妹は、お祈りをすませてから、頭を子ジカの背中に乗せました。これが妹の枕で、そうして妹は、安らかに眠りこみました。兄さんが人間の姿さえしていれば、それは、すばらしい生活だったでしょう。

こうして、しばらくのあいだ、兄さんと妹は、二人つきりできびしい森の中で暮らしておりました。ところが、ある日のこと、この国の王さまが、この森の中で大がかりな狩をもよおしたのです。すると、角笛を吹き鳴らす音や犬のほえ声、狩人の陽気なかけ声が、木木のあいだを響きわたりました。子ジカは、この物音を耳にすると、そこへ行ってみたくてたまりませんでした。「フー」と、子ジカは妹に言いました、「ぼくを外に出して、狩を見させてよ。もうこれいじょうがまんできないんだ。」子ジカが、いつまでもたのむので、女の子は、ついに承知してしまいました。「でもね」と、妹は子ジカに言いました、「日暮れにはもどってきてね。乱暴な狩人たちがこわいから、あたし、戸を閉めておくわ。お兄さんだと分かるように、帰ってきたら、戸をたたいて、妹や、中へ入れておくれ、と言ってちょうだいな。そう言わないと、あたし戸を開けないから。」こうして、子ジカは、外へ飛びだして行きましたが、外はとても気持ち良く、のびのびと空気をすって、とても楽しくなりました。王さまと狩人たちは、この美しい動物を見て、あとを追いかけてきましたが、追いつくことができませんでした。そうして、みんなが、つかまえたぞ、と思ったとき、子ジカは、やぶを飛びこえて、姿を消してしまいました。暗くなると、子ジカは、家へかけてきて、戸をたたいて、「妹や、中へ入れておくれ」と言いました。すると、戸が開いて、子ジカは飛んで入って、一晩中やわらかい寝床でゆっくりと休みました。次の日の朝、狩がふたたび始まり、またもや角笛の音や、狩人たちのソーレというかけ声を耳にすると、子ジカは、もうじつとしておられずに、「妹や、開けてくれ。外に行かなくちゃ」と言いました。妹は、子ジカに戸を開けてやると、「でもね、日暮れにはもどってきて、合言葉を言うのよ」と言いました。王さまと狩人たちが、黄金の首輪をつけた子ジカをまたも見つけ、

みんなで追いかけてましたが、子ジカの足がとても速く、すばっしこいので、つかまえられませんでした。みんなで一日中子ジカを追いかけていましたが、日暮れにとうとう狩人たちは、子ジカを取り囲み、一人の狩人が子ジカの足に傷を少し負わせましたので、子ジカは、びっこを引いて、かけ方がのろくなってしまいました。そこで、一人の狩人が子ジカのあとをこっそりつけて、小さな家まで行くと、子ジカが、「妹や、中へ入れておくれ」と言うのを聞き、それから戸が開いて、すぐにまた戸が閉まるのを目にしました。狩人は、このことをもれなく覚えておいて、王さまのところへ行行って、見たこと聞いたことを、全部話しました。すると、王さまは、「あす、もう一度狩に出かけるぞ」と言いました。

ところが、妹の方は、子ジカがけがをしているのを見ると、ひどく驚いてしまいました。妹は、子ジカについている血を洗い流し、傷口に薬草をはってあげると、「寢床でお休みなさい、子ジカちゃん。また元気になるようにね」と言いました。さて、子ジカの傷は、とても浅かったものですから、次の日の朝になると、子ジカは、「ぼく、がまんできないよ。行かなくっちゃ。それで、狩のにぎやかな物音をまたもや耳にすると、子ジカは、「ぼく、がまんできないよ。行かなくっちゃ。そう簡単につかまるもんか」と言いました。妹は、涙を流すと、「今度こそ、狩人たちは、あんたを殺してしまうわ。そうなりや、あたしは、この森の中で一人つきりになって、たよる人がだれもいなくなってしまうのよ。あんたを外へ出すわけにはゆかないわ」と言いました。「それじゃ、ぼくは、悲しみのあまり、ここで死んじゃうよ」と、子ジカは答えました、「角笛の音を聞くと、ほんとうに、飛んで行きたくなるんだよ。」こう言われると、妹もどうしようもありません。妹は、気も重く、戸を開けてやると、子ジカは、はしゃいで元気良く、森の中へ飛んで行きました。王さまは、子ジカの姿を目にすると、狩人たちに「よいか、あの子ジカを一日中追いかけるのじゃ、夜になるまでな。じゃが、あれに少しでもけがをさせてはならんぞ」と言いました。お日さまが沈むとすぐに王さまは、あの狩人に「さあ、行こう。わしに森の中の家を教えてくれ」と言いました。こうして、王さまは、家の戸の前になると、戸をたたいて、「妹や、中へ入れてお

くれ」と、大声で言いました。すると、戸が開いて、王さまが中に入ると、そこには一人の娘がいて、その美しいことと
いったら、王さまがそれまで見たことのないほどのものでした。娘は、入ってきたのが子ジカではなく、頭に黄金の冠を
乗せた男の人だということが分かると、びっくりしました。ところが、王さまは、娘を親しげに見つめると、娘に手をさ
しだして、「わしといっしょに城にきて、わしの妻になるつもりはないか」と言いました。「はい、お受けいたします」と、
娘は答えました。「ですが、子ジカもいっしょでなければなりません。子ジカを置いて行くわけにはまいりません。」王さ
まは、「そなたに生あるかぎり、子ジカは、そなたのもとに置いておくがよい。あれになに一つ不自由はさせん」と言
ました。そうしていると、子ジカが家の中へ飛びこんできましたので、妹は、子ジカをまたイグサの綱につなぐと、その
綱を手にとって、子ジカといっしょに家を出ました。

王さまは、その美しい娘を自分の馬に乗せ、お城へつれて行きました。お城に着くと、結婚式がたいそう豪華にとり行
なわれました。こうして、娘はお妃さまとなり、二人とも長いこと楽しく暮らしました。子ジカは、大事に世話してもら
い、お城の庭であちこちはねまわっておりまして。ところで、兄さんと妹が家を出て行くもとなつた意地悪なまま母の
方は、妹は森にすむどうもうなけものたちに食いちぎられ、兄さんは子ジカになって、狩人たちに撃ち殺されたものとは
かり思っておりまして。ところが、二人がとても幸せになつて、良い暮らしをしているといううわさを耳にすると、ま
母の心の中に、ねたみがムラムラとわいてきて、心安まるひまもなく、二人をどうにかして不幸に突き落としてやれない
ものかと、そればかり考えておりました。まま母の實の娘は、二目と見られないほど醜くて、片方の目しかありませんで
した。この娘がまま母を責めたてて、「お妃さまになるんなら、その幸せは、あたしの方（ほう）にふさわしかったのに」と言
いました。「いいから、おだまりよ」と言つて、ばあさんは、娘をなだめました、「そのときがくりやあ、ちゃんと手を打
わい。」やがて、そのときが近づき、お妃さまはかわいい男の子を産み、ちょうどそのとき、王さまは、狩に出かけてお

りました。すると、魔女のばあさんは、侍女になりすますと、体力が弱って寝ているお妃さまの部屋に入って、「さあ、どうぞ、お風呂の用意がととのいました。お風呂は、お体によろしゅうございますし、元気がでましよう。さめないうちに、お早くどうぞ」と言いました。魔女の娘も待ちかまえていて、二人は、体力の弱ったお妃さまを風呂場に運んで、湯ぶねに入れました。それから、二人は、風呂場の戸を閉めて、そこから逃げだしました。ところが、二人は、風呂の火を地獄の火のようにたきつけておきましたから、美しく若いお妃さまは、まもなく息がつかまって、死んでしまいました。こうしたことをすべてなし終えると、ばあさんは、実の娘をつれて行き、その頭にずきんをかぶせ、お妃さまの代わりにベッドへ寝かせました。ばあさんは、自分の娘をお妃さまの姿かっこうにさせましたが、なくなった片方の目だけは元どおりにすることはできませんでした。そこで、王さまがそれに気づかないように、魔女の娘は、目のない方を下にして寝なければなりませんでした。日が暮れて、王さまがお城にもどって、息子が生まれたことを聞くと、心から喜んで、愛する妻のベッドのそばに行つて、妻の様子を見るつもりでした。すると、そのとたんにおばあさんは、「とんでもございません。カーテンをお閉めあそばせ。お妃さまに、まだ日の光は毒でございます。お休みになりません」と大声で言いました。王さまは、ひきかえし、ベッドに寝ているのが、にせの妃だとは気づきませんでした。ところが、真夜中になって、草木も眠るころ、子ども部屋の揺りかごのそばに座り、一人まだ起きていた乳母が、部屋の戸が開いて、ほんとうのお妃さまが中に入ってくるのを見ました。お妃さまは、揺りかごから子どもを取りあげ、腕に抱くと、子どもにお乳をのませました。それから、お妃さまは、子どもの枕をふるってふくらませ、子どもをまた揺りかごの中へ寝かせて、子どもに小さなふとんを掛けてあげました。お妃さまはまた、子ジカのこと忘れず、子ジカの寝ている部屋の隅に行つて、子ジカの背中をなでてあげました。そののち、お妃さまは、ひとことも口をきかずに、また戸口から出て行きました。そこで、乳母は、次の日の朝、見張りたちに、昨晚だれがお城の中に入った者はなかったかどうか

たずねてみましたが、見張りたちは、「いいえ、だれも見かけませんでした」と答えました。そのようにして、お妃さまは、いく夜もいく夜も、やってきましたが、ひとことも口をききませんでした。乳母は、そのたびにお妃さまの姿を見ていたのでしたが、そのことを人に言うことは、さしひかえておりました。

こうして、しばらくすると、お妃さまは、その夜にかぎって口を開いて、こう言いました。

「わが子は、どうしているかしら。子ジカは、どうしているかしら。

わたしがくるのは、あと二度かぎり、それっきりよ。」

乳母は、お妃さまに答えませんでした。お妃さまがまた姿を消すと、王さまのところへ行つて、王さまに一切合切話しました。すると、王さまは、「ああ、なんといいことだ。わしは、今晚起きていて、子どものそばにいようぞ」と言いました。日が暮れて、王さまが子ども部屋に入りますと、お妃さまが真夜中にまた姿をあらわして、こう言いました。

「わが子は、どうしているかしら。子ジカは、どうしているかしら。

わたしがくるのは、あと一度かぎり、それっきりよ。」

こう言つて、お妃さまは、いつものように子どもの世話をし、子ジカの背中をなでると、やがて姿を消しました。王さまは、次の日の夜も起きておりました。ふたたび、お妃さまは言いました。

「わが子は、どうしているかしら。子ジカは、どうしているかしら。

わたしがくるのは、今度かぎり、これつきりよ。」

すると、王さまは、こらえきれなくなつて、お妃さまのところへ飛んで行って、「そなたは、まぎれもなく、わしの愛する妻じゃ」と言いました。すると、お妃さまは、「はい、わたしは、あなたさまの妻にございます」と答えました。そのとたん、神さまのお恵みで、お妃さまは、命を取りもどし、みずみずしく、血色の良い、元氣な姿になりました。そのち、お妃さまは、王さまに、意地悪な魔女とその娘が自分にくわえたひどい悪事を話しました。そこで、王さまは、二人を裁判にかけさせました。二人に判決が言いわたされ、魔女の娘は、森の中へつれて行かれて、どうもうなげものたちに食いちぎられ、また魔女は、火あぶりになり、みじめにも焼き殺されてしまいました。魔女が焼かれて、灰になると、子ジカは、元の人間の姿にもどりました。こうして、妹と兄さんは、死ぬまでいっしょに幸せに暮らしました。

『ラプンツェル』(KHM二二)

むかしむかし、あるところに亭主とおかみさんがいて、もう長いこと子どもを欲しがっておりましたが、子どもはさずかりませんでした。それでも、とうとう神さまが、二人の願いをかなえてくださるといふ兆しが、おかみさんにあらわれました。夫婦の家の裏側には、小さな窓が一つあつて、そこから世にも美しい花や野菜がたくさん植えられたすばらしい庭が見えました。ところが、その庭は、高い壁でかこまれていて、大きな魔力をもち、世の中の人みんなからこわがられ

ている女魔法使いのものでしたので、だれ一人として庭の中に入ろうとする者はおりませんでした。ある日のこと、おかみさんが窓ぎわに立って、庭を見おろしていると、世にもみごとなラプンツェルが植えられている一うねの苗床が目に入りました。そのラプンツェルは、とてもみずみずしく、青青としていましたので、おかみさんは、そのラプンツェルに大変な食欲をおぼえ、食べたたくて食べたたくて、たまらなくなりました。食べたいという思いは、日ましにつのるのに、おかみさんは、それを手に入れることができないということを知っておりましたので、おかみさんは、すっかりやせて、顔色も青ざめ、見るかげもなくなってしまいました。そこで、亭主は、びっくりして、「おまえ、どつか悪いのかい？」と聞きました。「あのね」と、おかみさんは答えました、「うちの家のうしろの庭に生えているラプンツェルを食べないと、あたし死んじまう。」亭主は、おかみさんを愛しておりましたので、「女房を死なせるくらいなら、ラプンツェルを取ってやろう。それでおれがどうなったって、かまやしない」と考えました。そこで、亭主は、夕やみにまぎれて、壁を乗り越え、女魔法使いの庭に入りこむと、大急ぎでラプンツェルを一つかみ掘り取って、おかみさんのところへもってきました。すると、おかみさんは、さっそくそれでサラダをこしらえて、ムシヤムシヤとたいらげてしまいました。ところが、そのラプンツェルが、とても口に合い、おいしかったので、おかみさんは、あくる日には、その三倍も食べたくなつてしまいました。おかみさんをおとなしくさせるために、亭主は、もう一度庭に入りこむしかありませんでした。そこで、亭主は、夕やみにまぎれて、またもや壁を乗り越えて行きました。ところが、壁をおりたとき、自分の目の前に女魔法使いが立っていたのですから、亭主は、びっくりぎょうてんしてしまいました。「おのれ、よくもあつかましく」と、女魔法使いは、おこつてにらみつけました、「人の庭に入りこんで、泥棒みたいに、うちのラプンツェルを盗むなんて。こらしめてやるわい。」「どうか」と、亭主は答えました、「ごかんべんください。やむにやまれずにしたことなのですから。てまえの女房が、おたくさまのラプンツェルを窓から目にし、それはそれは大変な食欲をおぼえてしまいました、それを

食べなければ、死んでしまうなどと言うものですから。」これを聞くと、女魔法使いは、怒りをやわらげて、亭主に言いました。「おまえさんの言う通りなら、好きなだけラプンツエルをもつていつていいさ。じゃが、一つ条件があるんだよ。おかみさんが産む子どもをね、おまえさん、あたしによこすんだよ。子どもは、幸せになるさあね。あたしが、母親がわりにめんどうを見てあげるんだから。」亭主は、不安が先にたつたものですから、なにかも承知してしまいました。こうして、おかみさんがお産をすると、すぐさま女魔法使いが姿をあらわして、その子どもに「ラプンツエル」という名前をつけて、いっしょにつれて行ってしまいました。

ラプンツエルは、世にも美しい子どもになりました。ラプンツエルが十二歳になったとき、女魔法使いは、ラプンツエルを森の中にある塔の中に閉じこめてしまいました。その塔には、階段も戸もなく、高いところに小さな窓が一つあるだけでした。女魔法使いが塔の中に入ろうとするときには、その下に立って、こう叫んだのでした。

「ラプンツエル、ラプンツエル、

おまえのお下げ髪おろしておくれ。」

ラプンツエルは、長くて、みごとな、金をつむいだようなすばらしい髪の毛をしておりました。女魔法使いの声を耳にしますと、ラプンツエルは、巻きあげていたお下げ髪をほどいて、それを窓の上の鉤に巻きつけました。すると、お下げ髪は、十二メートルも下にたれ下がり、女魔法使いがそれを伝ってあがつて行くのでした。

それから二、三年して、王子さまが馬に乗ってこの森を通り、塔のそばを通り過ぎました。そのとき王子さまに、とても愛らしい歌声が聞こえてきましたので、王子さまは、立ち止まって、耳をかたむけました。それは、ラプンツエルの歌

声で、この娘は、さびしさのあまり、自分の愛くるしい歌声をひびかせて、退屈しのぎをしていたのでした。王子さまは、ラプンツェルのところにあがって行こうと思つて、塔の入口を探しましたが、どこにも入口は見つかりませんでした。王子さまは、お城へ帰りましたが、その歌声が王子さまの心をたいそう感動させましたので、王子さまは、その歌声に聞きほれておりました。あるとき、王子さまが木の陰に立っていますと、女魔法使いがやってくるのが見ええました。そして、女魔法使いが上の方に向かつて叫ぶのが聞こえました。

「ラプンツェル、ラプンツェル、

おまえのお下げ髪おろしておくれ。」

すると、ラプンツェルがお下げ髪をおろし、女魔法使いがラプンツェルの方へあがってくるのでした。「これが、上にあがるハシゴだというのなら、ほくも運だめしを試みよう。」こうして、あくる日、暗くなりかけたころ、王子さまは、塔のところへ行つて、叫びました。

「ラプンツェル、ラプンツェル、

おまえのお下げ髪おろしておくれ。」

すると、たちまちお下げ髪がおりてきて、王子さまは上へあがって行きました。

初め、ラプンツェルは、男の人など見たことがありませんでしたので、一人の男の人が自分の方に入ってきたとき、ひ

どくびつくりしてしまいました。ところが、王子さまは、とてもやさしくラプンツェルに話しかけ、ラプンツェルの歌声によって自分の心が大きな感動を受け、その歌声の本人に会いたくて、いてもたってもおられなかったことを話して聞かせました。これを聞くと、ラプンツェルのこわいという気持ちも消えうせて、王子さまが、自分を夫にしてくれませんか、とたずねたとき、ラプンツェルは、王子さまが若くて美しいことに気づいたものですから、「この人は、名付け親のおばあさんより、あたしをかわいがってくれるにちがいない」と考えて、「はい」と言いつて、自分の手を王子さまの手に重ねてしまいました。ラプンツェルは、言いました。「あたしは、喜んであなたとまいます。けれど、どうして下へおりられましょうか。あなたがくるたびに、毎回絹ひもをもつてきてください。それを編んで、あたしがハシゴを作りましょう。そうして、ハシゴができあがりしたら、あたしが下へおりますから、あたしをあなたの馬に乗せてください。」二人は、おばあさんが昼にやってくるので、それまでは毎日夜に、王子さまがラプンツェルのところにくるよう取り決めました。女魔法使いは、このことにまったく気づきませんでした。けれども、あるときラプンツェルが、こう言いました。「ねえ、おばあさん、いったいどうしておばあさんは、あの若い王子さまより、引きあげるのに、ずうっと重いんです。うね。王子さまは、あつと言うまに、あたしのそばにきてしまうのに。」「えい、この罰あたりめ」と、女魔法使いは叫びました。「とんでもないことを言うやつじゃ。おまえを世間から隔離したと思つとつたのに。よくも人をだましたな！」女魔法使いは、怒つて、ラプンツェルの美しいお下げ髪を二、三回左手に巻きつけると、右手にハサミを取つて、ジョキジョキと切つてしまいましたので、みごとなお下げ髪が床にころがりました。それから、女魔法使いは、情けようしやもなくラプンツェルを荒れ野につれて行きましたので、ラプンツェルは、そこでひどくつらくて、みじめな暮らしをしなければなりませんでした。

ところが、ラプンツェルを追いだしてしまつたその日のこと、女魔法使いは、日が暮れると、切り取つたお下げ髪を塔

の窓の鉤にしばりつけておきました。こうして、王子さまがやってきて、

「ラプンツェル、ラプンツェル、

おまえのお下げ髪おろしておくれ。」

と叫ぶと、女魔法使いは、お下げ髪をおろしました。王子さまは、上の方へ登って行きましたが、けれども、上には自分のいとしいラプンツェルではなくて、女魔法使いが、王子さまを意地悪な、憎悪のまなざしでにらみつけておりました。「おやまあ」と、バカにして、女魔法使いは叫びました、「かわいい奥さんをつれて行こうってのかい？ じゃがの、きれいな小鳥は、もう巢の中にいないし、もう唄いもしないんだよ。ネコがそいつをつれて行っちゃったし、おまえの目玉だってひっかき出すかもねえ。おまえのラプンツェルは、おしまいだよ。もう二度と姿を見られないだろうよ。」王子さまは、大きな悲しみのあまり、度を失って、やけっぱちになり、塔から身を投げてしまいました。命こそ落としてしまいましたが、けれども、イバラの中に落ちたものですから、イバラで目を突いて、目がつぶれてしまいました。それで王子さまは、盲となって、森の中をあちこちさまよい、木の根や野イチゴばかり食べ、いとしい妻を無くした悲しみを嘆き、涙を流すばかりでした。こうして、二、三年の間、みじめな暮らしをして、あちこちさまよい歩いていると、とうとう、とある荒れ野にたどりつきました。その荒れ野の中では、ラプンツェルが、自分が産んだ息子と娘の双子といっしょに、ほそぼそと暮らしておりました。やがて、王子さまは、とても聞きおぼえのある声を耳にしました。そこで、王子さまは、声のする方へ向かうと、ラプンツェルには、それが王子さまだと分かりましたから、王子さまの首に抱きついて、泣きました。ところが、ラプンツェルの流した涙の二粒が、王子さまの両目をぬらすと、目の前が明るくなって、王子さ

まは、もと通りに目が見えるようになりました。王子さまは、ラプンツェルを自分のお城につれて行き、そこで喜び迎えられました。こうして、二人は、それから未長く幸せで、不自由なく暮らしました。

『ヘンゼルとグレーテル』（KHM一五）

大きな森に入る入口のところに、一人の貧しい木こりが、おかみさんと二人の子どもといっしょに住んでおりました。男の子はヘンゼルという名前で、女の子の方はグレーテルという名前でした。木こりは、食べものにことかいておりましたが、あるとき、その国に大飢饉が起こると、その日その日のパンすら手に入れることができなくなってしまうとすると、木こりは、夜にベッドの中であれこれ考えこむようになり、心配のあまり、しきりと寝返りをうち、ため息をもらして、おかみさんに言いました。「おれたちやあ、どうなるんだらうな。どうやったら、かわいそうな子どもたちを養つてゆけるんだらうな。もう、自分たちの食べものすらないんだからなあ。」「いいかい、おまえさん」と、おかみさんは答えました、「あすの朝一番に、子どもたちをつれ出して、森へ行くんだよ。森の一番奥深いところへね。そこで火をおこして、二人にパンを一切れやるのよ。そうして、あたしたちや仕事に出かけて、子どもたちを置きざりにするのさ。子どもたちやあ、家に帰る道が分からないんだから、それで厄介ばらいできるってもんだよ。」「だめだよ、おまえ」と、亭主は言いました、「そんなことあ、できん。子どもを森に置きざりにするなんて、とてもそんな気にはなれんよ。そしたら、じきに森のけだものどもがやってきて、子どもたちを食いちぎってしまうだらうよ。」「おまえさんも、バカだねえ」と、おかみさんは言いました、「さもなきや、あたしたちやあ四人とも、餓え死にするしかないんだよ。だったら、おまえさ

ん、四人分の棺桶作つとくれ。」こう言つて、おかみさんは、亭主をしつこく責め立てましたので、とうとう亭主は、承知してしまいました。「それにしても、やつぱり子どもたちがかわいそうだな」と、亭主は言いました。

二人の子どもたちも、空腹のあまり眠れませんでしたので、ママ母が父親に言ったことを聞いてしまいました。グレーテルは、ボロボロと涙をこぼして泣くと、ヘンゼルに言いました。「あたしたち、もうおしまいね。」「シーツ、グレーテル」と、ヘンゼルが言いました、「メソメソするなよ、ぼくがね、きつとどうにかするからね。」そうして、親たちが眠りこむと、ヘンゼルは起きあがり、上着を着て、くぐり戸を開けて、こっそり外に出ました。すると、お月さまが、コウコウと照つていましたので、家の前まえにある白い小石こいしが、ほんものの銀貨ぎんかのように光ひかっていました。ヘンゼルは、かがんで、入るだけたくさんの小石こいしを上着うわぎのポケットにつめこみました。それから、ヘンゼルは、ベッドにもどつて、グレーテルに言いました。「安心あんしんしな、グレーテル。ゆつくりお休みやすみ。神さまは、ぼくたちを見捨てやしないよ。」こう言つて、ヘンゼルは、またベッドにもぐりこみました。

夜よが明けると、まだ日の昇のぼらないうちに、もうおかみさんがやってきて、二人の子どもを起こしました。「起きるんだよ、このなまけものたちめ。みんなでたきぎを取りに、森もりに行くんだよ。」それから、おかみさんは、二人にパンを一切ひときれずつわたして、言いました、「ほら、これがおまえたちの昼ひるごはんだよ。だけど、お昼前に食たべちゃだめだよ。ほかに、なんにもあげないからね。」ヘンゼルが、ポケットに小石こいしをつめこんでいたので、グレーテルが、そのパンを前まえかけの下したへしまいこみました。そうして、みんなで森への道みちを歩きはじめました。しばらく行くと、ヘンゼルは、立ちどまって、家の方ほうをふり返り、同じ動作どうさをなんどもくり返かえしました。そこで、おとうさんが言いました、「ほら、ヘンゼル、なにを見ているんだい。おくれるじゃないか。気きをつけて、さつさと歩くんだよ。」「でも、おとうさん」と、ヘンゼルは言いました、「ぼくの白い小貓こねこちゃんを見ているんだよ。屋根やねの上に座すわつて、ぼくにさよなら言つてるんだよ。」「すると、

おかみさんは言いました、「バカだね、ありやあおまえの小猫なんかじゃないよ。朝日がね、煙突にあたって光ってるんだよ。」けれども、ヘンゼルは、小猫を見ていたのではありませんでした。そのたびに、ピカピカの小石を自分のポケットから取りだして、道に落としていたのでした。

森の真ん中までくると、おとうさんが言いました、「さあ、おまえたち、たきぎを集めるんだよ。おとうさんは、おまえたちが寒くならないように、火をおこすからね。」ヘンゼルとグレーテルは、小枝を集めて、うず高く積みあげました。小枝に火がつけられて、炎が高く燃えあがると、おかみさんは言いました、「さあ、おまえたち、火にあたって、ゆつくり休むんだよ。あたしたちや、森へ行って、木を切るからね。仕事がすんだら、またおまえたちを迎えにくるからね。」ヘンゼルとグレーテルは、火のそばに座っていましたが、お昼になると、めいめい自分のパンを食べました。木を切る斧の音が聞こえたので、二人は、おとうさんは近くにいるものと思っておりました。ところが、それは斧の音ではなく、父親が枯れ木にしばりつけていた太い枝が、風に吹かれて、あちこちぶつかっている音だったのです。二人は、長いことそこに座っていますと、疲れてきて、まぶたが重たくなって、ぐっすり眠りこんでしまいました。二人が、やっと目をさましたころには、もう真っ暗な夜になっていました。グレーテルは、泣きだして、こう言いました、「あたしたち、どうしたら森から出られるの？」けれど、ヘンゼルは、グレーテルをなぐさめて、言いました、「もうちよつと待ってね。お月さまが昇ったら、すぐ道は見つかるから。」さて、真ん丸なお月さまが空に昇ると、ヘンゼルは、妹の手を取って、落としてきた小石をたどって歩きました。小石は、真新しい銀貨のように光って、二人に道を教えてくれました。二人は、夜通し歩いて、夜が明けるころ、ふたたび父親の家にもどってきました。二人が戸をたたくと、おかみさんが戸を開けましたが、そこにいるのがヘンゼルとグレーテルだと分かると、こう言いました、「悪い子だねえ、どうしてこんなにおそくまで森の中で寝ていたんだい。あたしたちや、おまえたちが、もう家に帰るつもりがないのかと思ってたのに。」けれ

ど、父親は、喜びました。といますものも、子どもたちを置きざりにしたことを、父親は、とても気にしていたからです。それから長いことたたないうちに、またもや国中が飢饉に苦しめられると、子どもたちは、母親が夜、ベッドの中で父親にこう言っているのを聞きました。「またもう、ゼーんぶ食べちゃったわ。あたしたちにや、もうパン半本しかないのよ。それで、一卷の終わりだよ。子どもたちに出て行ってもらわなくちゃ。あの子たちを、もつと森の奥につれて行きましょ。帰りの道を見つけれられないようにさあ。それがいいに、あたしらの助かる道がないわよ。」これを聞くと、亭主の気は重くなりましたので、こう考えてしまいました。「最後の一家じりまで、子どもたちと分けあう方が、良いのになあ。」けれど、おかみさんは、亭主の言うことには耳も貸さず、ガミガミどなって、亭主をしっかりとつけました。いったん「うん」と言ってしまうものなら、次に「だめ」とは言いにくいものなのです。亭主は、一度ゆずったのですから、二度目もまた、ゆずらないわけにはゆきませんでした。

ところが、子どもたちは、まだ起きておりましたので、この話を聞いてしまったのです。親たちが眠ると、ヘンゼルは、また起きあがり、外に出て、このまえと同じように、小石を拾おうとしました。けれど、おかみさんが、戸に鍵をかけてしまっておりましたから、ヘンゼルは、外に出られませんでした。それでも、ヘンゼルは、妹をなぐさめて、こう言いました、「泣くんじゃないよ、グレーテル。安心して眠るんだよ。神さまがね、きつとぼくたちを助けてくださるんだから。」朝早く、おかみさんがやってきて、子どもたちをたたき起こしました。子どもたちは、パンを一切れもらいましたが、それは、このまえのときよりも小さなものでした。森への道を歩きながら、ヘンゼルは、そのパンをポケットの中に入れて、たびたび立ちどまって、パンかけを地面に落としました。「ヘンゼル、どうしておまえは、立ちどまって、うしろをふり返るんだい」と、おとうさんが言いました、「先に進むんだよ。」「ぼくはね、ハトちゃんを見てるんだよ。ハトちゃんが屋根にとまって、ぼくにさよならを言ってるんだもの」と、ヘンゼルは答えました。「バカだねえ」と、おかみさん

は言いました、「ありやあ、ハトちゃんなんかじゃないよ。朝日がね、煙突の上にあたって、光っているのさ。」けれども、ヘンゼルは、次から次へと、パンかけをぜんぶ道に落としてしまいました。おかみさんは、子どもたちを、このまえよりもっと深い森の中へつれて行きました。そこは、子どもたちが、それまでまだ一度もきたことがないところでした。そこで、また大きな火がたかれると、おかみさんが言いました、「さあ、おまえたち、ここに座っているんだよ。疲れたら、少し眠ってもいいからね。あたしたちや、森に行つて、木を切ってくるから。夕方になつて、仕事がすんだら、またおまえたちを迎えにくるからね。」お昼になると、グレーテルは、自分のパンをヘンゼルと分けあいました。ヘンゼルは、自分の分を道にまいてしまつていたからです。それから、二人は、眠りこんでしまいました。そうして、夕方がすぎてしまいました。かわいそうに、だれも子どもたちのところへは、やつてきませんでした。二人は、真つ暗な夜になつて、ようやく目をさました。すると、ヘンゼルは、妹をなぐさめて、こう言いました、「待つんだよ、グレーテル。もうすぐお月さまが出るから。お月さまが出れば、ぼくが道にまいたパンかけが見えるからね。パンかけが、ぼくたちに家に帰る道を教えてくれるから。」お月さまが出ると、二人は、歩きだしました。ところが、パンかけは、一つも見つかりませんでした。といいますのも、森や畑を飛びまわっている何千もの小鳥たちが、パンかけをすべて、ついばんでしまつてたからです。ヘンゼルは、グレーテルに、「きつと、道は見つかるよ」と言いましたが、でも、道は見つかりませんでした。二人は、一晩中歩き、さらにもう一日、朝から晩まで歩きましたが、森からは出られませんでした。それに、とてもお腹がすいてしまいました。といいますが、二人は、森に生えていた野イチゴを二つ、三つ食べたきりだつたからです。そうして、二人は、とても疲れて、立つていられないほどでしたので、木の下に横になつて、眠りこんでしまいました。さて、二人が父親の家を出てから、三日目の朝になりました。二人は、また歩きはじめましたが、ますます森は深くなるばかりでした。すぐにでも助けがあらわれませんと、二人は、力がつきて、死んでしまふしかありませんでした。お昼

になると、二人は、一羽の雪のように白く、美しい小鳥が枝にとまっていて、とてもすばらしい声で歌っているのに気づきました。歌い終わると、小鳥は、羽をはばたかせて、二人の先にたつて飛んで行きました。二人がそのあとを追いかけ行きますと、やがて一軒の小さな家にたどり着きました。小鳥は、その家の屋根にとまっていたので、二人が家のすぐ近くまでやってくると、その家がパンでできていて、屋根がクッキーでふかれているのに気づきました。おまけに、窓は、氷砂糖でできていたのです。「さあ、食べようよ」と、ヘンゼルは言いました、「いただきまーす。ぼくは、屋根を一かけ食べるからね、グレーテル。おまえは、窓を食べなよ。窓は、甘いよ。」ヘンゼルは、手を上にのばして、屋根を少しかいて、どんな味がするか試してみました。グレーテルの方は、窓ガラスに身をよせて、窓ガラスをかじりました。すると、部屋の中から、かほそい声が聞こえてきました。

「ボリボリ、ガリガリ、かじるのは、

どこのどいつだ、わしの家をかじるのは。」

子どもたちは、答えました。

「風、風だよ、

天の子だよ。」

こう言つて、二人は、それに迷わされずに、食べ続けました。ヘンゼルは、屋根がとてもおいしかったので、大きなか

けらをはがしおろしました。グレーテルの方は、丸い窓ガラスをまるごと取りはずし、座りこんで、それをうれしそうに食べはじめました。すると、とつぜん戸が開いて、一人のひどく年老いたおばあさんが、杖をつきながら、ヨタヨタはいて出てきました。ヘンゼルとグレーテルは、びっくりぎょうてんしましたので、両手にもっていたものを落としてしまいました。すると、おばあさんは、頭をグラグラゆらしながら言いました、「おやまあ、だれがおまえたちを、ここへつれてきたのじゃな。さあ、中へお入り。わしの方へ、おいで。こわいことなんか、なんにもないんじゃから。」おばあさんは、二人の手をつかんで、家へつれこみました。家に入ると、ミルクや砂糖をまぶしたケーキ、リンゴやクルミといったごちそうが出されました。それが終わると、二つのきれいなベッドに、白いシーツがかけられました。そこで、ヘンゼルとグレーテルは、そのベッドに入って、天にも昇るこちで眠りました。

おばあさんは、さも親切そうなふりをしていただけで、ほんとうは、子どもたちを待ちぶせしていた邪悪な魔女なのでした。パンの家を作ったのも、子どもたちをおびきよせるためにほかなりませんでした。子どもが手に入ると、魔女は、その子どもを殺し、それを煮て、食べるのです。それが、魔女のお祝いの日なのでした。魔女は、赤い目をしていて、遠くまで見ることができませんが、それでも、嗅覚が動物のようになると、人間が近づいてくると、それがすぐに分かるのです。ヘンゼルとグレーテルが近づいてきたとき、魔女は、意地悪く笑いながら、バカにして言いました、「こいつら、もらったわい。わしからのがれられんぞえ。」朝早く、子どもたちが目をさませないうちに、魔女は、もう起きて、二人の子どもが、ふっくらとした赤いほっぺをして、スヤスヤ寝ているのを見ると、こうつぶやきました、「こいつあ、いいごちそうじゃわい。」そこで、魔女は、やせこけた手でヘンゼルをつかまえると、ヘンゼルを小さな家畜小屋の中に入れ、格子戸をしめて、とじこめてしまいました。ヘンゼルが、どんなに泣きわめいても、なんの役にもたちませんでした。それから、魔女は、グレーテルのところに行って、グレーテルをゆさぶり起こすと、どなりつけました、「起きろ、

なまけものめ。水をくんで、おまえの兄ちゃんのために、おいしいものをこしらえてあげな。兄ちゃんは、外の家畜小屋の中にいるから、太らせてあげるんだぞ。太ったら、わしが食ってやるからな。」グレーテルは、オイオイ泣きはじめましたが、それもなんの役にもたちませんでした。グレーテルは、邪悪な魔女が言いつけた通りのことをしなくてはなりませんでした。

さて、かわいそうなヘンゼルには、とびきり上等なごちそうが出されましたが、グレーテルの方は、カニの殻しかもらえませんでした。まい朝、魔女は、ヨタヨタ歩いて、家畜小屋に行くと、どなりました。「ヘンゼル、指を出しな。じきに、脂がのるかどうか、さわってみるんじゃないか。」ところが、ヘンゼルは、魔女に小さな骨を出しました。すると、魔女は、ほんやりとしか見えませんでしたから、それが良く見えずに、ヘンゼルの指とばかり思っ、ヘンゼルがいつこうに太りそうにもないのを不思議に思いました。四週間たつても、ヘンゼルが、あいかわらずやせたままなので、魔女は、しんぼうできなくなつて、もうそれいじよう待ちきれなくなつてしまいました。「おいこら、グレーテル」と、魔女は、妹にどなりました。「さつさと、水をくんでくるんだよ。ヘンゼルが太ろうが太るまいが、あすはあいつを殺して、煮てやるぞ。」かわいそうに、妹は、水をくみにやられたとき、どんなに悲しみ、どんなにたくさんの涙がほつぺをつたつて流れ落ちたことでしょうか。「神さま、どうかあしたたちを助けてください」と、グレーテルは叫びました。「こうなるより、森のけだものたちに食べられてしまった方が良かった。そうすれば、おにいちゃんといっしょに死ねたのに。」泣きわめいても、むだじゃよ」と、魔女は言いました。「なんの役にもたたんさ。」

朝早く、グレーテルは、外に出て、水の入った鍋をかけ、火をおこさなければなりませんでした。「まずは、パンを焼こう」と、魔女は言いました。「パン焼きがまには、もう火を入れてあるし、粉もこねてある。」魔女は、かわいそうに、グレーテルをパン焼きがまの方へつきとばしましたが、パン焼きがまからは、もう炎がメラメラと燃えあがっていました。

「中に、はいこみな」と、魔女は言いました。「パンを入られるくらい、中が十分熱くなっているかどうか、確かめるんだよ。」グレーテルが中に入ったら、魔女は、焼きがまのふたをしめて、その中で丸焼きにして、グレーテルも食べてしまつつもりでした。けれども、グレーテルは、魔女のたくらみに気づきましたので、こう言いました、「どうしたら良いのか、分からないの。どうしたら、中へ入れるのかしら。」「おバカさんじゃねえ」と、魔女が言いました、「焼きがまの口は、こんなに大きいじゃろが、ほら、よく見る。わしじゃつて入れるがねえ。」こう言いながら、魔女は、ヨタヨタよつてきて、頭をパン焼きがまの中につっこみました。そこで、グレーテルは、魔女をドンとおしましたので、魔女は、焼きがまの奥へのめりこんでしまいました。グレーテルは、鉄の口をしめて、かんぬきをかけてしまいました。ウワァー、こわい。魔女は、わめきちらしはじめ、それはそれは、ゾオーツとするほどでした。それで、グレーテルは、走りさつてしまいましたので、ばちあたりの魔女は、はじめにも、焼け死んでしまいました。

グレーテルはと言えば、まっしぐらにヘンゼルのところに走って行って、家畜小屋の戸を開けて、叫びました「ヘンゼル、あたしたち、助かったわ。魔女のばあさん、死んじゃったわよ。」すると、ヘンゼルは、鳥かごの戸を開けられた小鳥のように、外へ飛びだしてきました。二人の喜びようといったら、それはもう、抱きあつたり、あちこちはねまわつたり、キスしあつたりで、たいへんでした。二人は、もうこわがる必要もありませんでしたので、魔女の家へ入りました。すると、部屋のすみずみには、真珠や宝石の入った箱が置いてありました。「こつちの方が、小石よりいいや」と、ヘンゼルは言つて、ポケットに入るだけいっぱい入れました。「さあ、もう出かけようよ」と、ヘンゼルが言いました、「魔女の森から出られるようにね。」こうして、二、三時間行くと、二人は、大きな川のそばに出ました。「ぼくたちには、わたれないや」と、ヘンゼルは言いました、「小橋も大橋も、なんにも見えないよ。」「ここには、わたし舟もないしねえ」と、グレー

テルは答えました、「でも、ほら、一羽の白いカモがいるわよ。たのんだら、向こうにわたしてくれるわよ。」こう言つて、グレーテルが大きな声で叫びました。

「カモさん、きてちょうだいな、

ここにグレーテルとヘンゼルがいるの。

小橋も大橋も、なんにもないの、

白いお背中に乗せてちょうだいな。」

すると、ほんとうにカモが近よつてきましたから、ヘンゼルは、その背中に乗つて、妹にも自分のそばに座るようさそいました。「だめよ」と、グレーテルは答えました、「そしたら、カモさんには重すぎるわ。一人ずつ順番にわたしてもらいましょうよ。」親切なカモさんは、そうしてくれました。こうして、二人が無事に向こう岸にわたつて、しばらく歩くと、森のようすが、だんだなじみのものに思われてくるのでした。そして、とうとう二人は、遠くから、おとうさんの家を目にしました。すると、二人は、かけだして、部屋の中へと飛びこみ、おとうさんに抱きつきました。木こりとは言へば、子どもたちを森の中に置きざりにしてからというもの、楽しいときは、一ときもありませんでした。おかみさんとは言へば、もう死んでしまつておりました。グレーテルが前かけをふるうと、真珠や宝石が部屋のあちこちに飛びちりました。すると、ヘンゼルは、手にいっぱい真珠や宝石や、次次にポケットから取りだして、まさちりました。これで、心配の種は、みんな消えて、家族そろつて、心から楽しく暮らしました。お話は、これでおしまい。ほら、あそこにネズミが一匹いますよ。ネズミをつかまえたなら、それで大きな大きな毛皮の帽子を作れますよ。

注

この翻訳の底本は、『Brüder Grimm: Kinder- und Hausmärchen. 3 Bde., Philipp Reclam jun. GmbH & Co., Stuttgart 1980.』である。

訳者は、『グリム童話翻訳の歴史的外観——著者による童話八編の新訳と共に——』と題して、平成二二(二〇〇〇)年に、すでにグリム童話の新訳を呈示した。その際、使用した漢字すべてにルビを施した。その理由は、主として次の四点であった。

- 一、確かに、園児や小学生のために、その学習程度に応じた漢字を使用すべきであるとはいっても、まったく漢字を使わないのは、漢字の学習上の必要性を鑑みると、やはり問題である。
- 二、従って、漢字の使用をその学習程度に応じて使い分けるとしても、ある程度の漢字の使用が望ましい。
- 三、この関連において、使用するすべての漢字にルビを振ることによって、小学生にも幅広く読まれうるようにする。
- 四、この方法を採用することによって、漢字の使用を保持する。

漢文のように、すべて漢字というのも、日本の文字文化という点では違和感を感じる。逆に、いくら日本の文字文化とはいえ、平仮名・カタカナだけの文章でも、日本人は違和感を感じるであろう。従って、漢字と平仮名・カタカナの調和的混淆が求められる。とはいうものの、これが実に難しい問題と言わざるをえない。

前回の試みにおいては、すべての漢字にルビを振ったが、これも実際に行なってみると、若干の煩わしさを伴うことが判明した。つまり、「言う」とか「王子さま」「お姫さま」「王さま」「お妃さま」などといった言葉において頻繁に現れる漢字すべてにルビを振っていると、字面が煩瑣な印象を与えてしまうと思われるのである。ただし、前述の四項目の効用は、決して忘れてはならぬと思われるゆえに、今回は、「一度現れた漢字は、しばらくルビを振らず、同ページ後半ないし次ページに現れたとき再びルビを振る」よう試みた。

この試みをしばらく続けてみるつもりではあるが、その途中で新たな発見があれば、これまでの方針に修正を加える可能性もある。さらに、ここには使用フォントの大きさという問題も潜んでいる。小学校低学年用には比較的大きなフォント、小学校高学年では比較的大きなフォントの使用という傾向は、今のところ明確に確認される。

こうした試みののちに、「童話に関する挿し絵の問題」に考察を加える予定である。